

No. 1116

自閉症児に明日を がんばれ雄心ちゃん

親は生れた我子に英雄の心をたくし雄心と名付けた。

しかし3才を過ぎても、親すら判別できず、言葉もなく心を閉ざしたままであった。

それ以来、親は希望の灯をもとめ、病院やし設を廻る日が続いた。そして昭和48年4月、4才の春、武藏野東幼稚園にたどりついた。北原園長は

「雄ちゃんはここへきた時、歩くことすらできず、くつもはけなかった。他動的に動きまわり、言葉も一切なく奇声をあげるだけであった。情緒が不安定なこの子等に一番必要な環境は、生活の場、子ども集団の場で、生活を模ほうすることだと思います。」

自閉症児は心身共に虚弱だという。更に神経が過敏で発達がすべての面でアンバランスだ。そして、周りの動きに反応を示すこともなく、表情も能面のようだ。

いまだ原因もはっきりせず、これといった治療法も確立されていないのが現状だ。様々の病院や大学の研究室を廻され、学令児に達したこどもたちは、就学ゆうよや免除となり社会の片隅においやられてしまう。

親は絶望の渦で苦しみの毎日を耐えねばならない。

雄心ちゃんと両親も例外ではなかった。しかし、この武藏野東幼稚園で集団教育の治療法が実を結び、雄心ちゃんは、少しづつ心を開いていった、くつもはけ、スプーンももてるようになり、言葉もでてきた。

2年の治療部を終え、この春から、普通の園児のいるコスモス組に配属された。雄心ちゃんの表情に笑顔も戻った。

元気で強い普通児の刺激が何よりも必要だと園長は話す。その刺激を受けて雄心ちゃんは伸びていった。

1日の出来事をまだたない言葉で両親に話す。親にとって長く待ち遠しい日であった。

「武藏野東幼稚園のひとすじの光により我子はかろうじて人間の仲間にめぐりあうことができました。育てにくい子供こそ育てることが教育だという素晴らしい教育理念、情熱あふれた先生方、健康で質の良い普通児の集団、そういった恵まれた教育環境の中で、我子はようやく心を開きはじめております。人間の尊厳と教育の偉大さにあらためて深く感動しております。」

社会との関係を求め、自分の世界を精いっぱい努力しているこの子等にどうか人間の仲間として手をそえてやって下さい。」

雄心ちゃんの父親安藤政弘さんは自閉症児親の会全国大会で訴えた。全国で1万人以上といわれる自閉症児。この武藏野東幼稚園でも850人の園児にまじって160人の自閉症児が明日をめざして生きている。雄心ちゃんは元気な園児の中で情緒障害を乗り越える日もそう遠くない。来年の春には、ランドセルを背負った姿がみられるかも知れないという。